# 作業部屋

如月由縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
作業部屋

【Ｎコード】
Ｎ１９９３Ｚ

【作者名】
如月由縁

【あらすじ】
作者が作業するための執筆作業中の作品置き場です。当然ネタバレになりますのでご注意ください。ネタバレＯＫな方は感想などで校正作業などお手伝いくださいませ。（Ｒ－１５、残酷描写は今後の作品のための保険です）

# 『ある工業大学生の受難』第４６話

Ｗｈｅｎ　Ｙｏｕ　Ｗｉｓｈ　Ｕｐｏｎ　Ａ　ｍｅｔａｌｓ

「全く、技師というのはなんとも無粋な生き物だね。一度興味が向けば周りなど見えていないのだから。
そうは思わないか？　ホーリィ」

イズムの作業場の壁に立てかけられた作品を眺めつつ、ホーリィが淹れた紅茶の匂いを楽しみ優雅にカップを口に傾けルナスが言う。

「そうですね……でも楽しそうです」

おっとりとしたその言葉はホーリィのものである。今日の朝はルナスに怯え、道中では怒気を含んだ物言いをしていたホーリィだが、今では口調も台詞も平常のものに近い。

「そうだね。それについては否定しないが、けれども、こうも放置されているこちらの身にもなって欲しいものだね」

口元だけで微笑みつつ、ルナスはホーリィにそんな言葉を返した。口先ではそんな事を言っているが、実際のところ、ルナスはそれほど退屈しているわけではない。イズムの工房の壁に立てかけられている作品は例え現代人から見ても大層なものであり、刀剣類が好きなルナスにとって見ているだけで飽きる事が無いものである。むしろ現在は普段は触ると口うるさいイズムの小言がない分、自由に手にとって思うままに振るったりできるだけ余分に楽しんでいる状況であった。

さて、そんな風にルナスとホーリィの二人に関しては割と優雅で有意義な午後を過ごしていたりするが、この物語の中心であるべき鉄兵が現在何をしているかといえば、それはルナスの背中越しに確認ができた。

そこには、作業場に築かれた土間の上で熱弁を振るう鉄兵とイズム。それと二人の話を面白そうに聞いているミスラルの姿があった。そこで何が行われているかと言えば、端的に言ってしまえば講義である。鉄兵がどこぞから作り出した巨大な黒板もどきを前に、チョークを片手に突発的に簡単な電気回路の講義を催しているのである。

熱意を帯びた講師（鉄兵）と受講（イズム）生の図は、見た目を考えれば真逆であるのが正常であり、傍から見れば滑稽に見えるかもしれない。

しかし当事者である二人は互いに至極真剣であり、そこに余人の入り込む余地はない。

教授の代理講義で鍛えた講義の術は丁寧で理路釈然としており、それでいて叩きつけるような容赦の無い切れ味がある。対してイズムはこの世界の誰も知らぬ未知かつ稀有なその言葉を瞬時に精査し、理解するどころか講義に隙と穴あれば果敢に質疑し、鉄兵もそれに磐石に応答する。

その様は端から見れば口げんかをしているような荒々しさがあり、まるで理屈の闘技場で剣を交える剣闘士のような趣がある。が、しかし当人達の立場に立てば、それは一つの理解に達するために互いに協力して熱く激しい言葉の舞踏を演技しているかのような充実した心地があった。

さてなぜこのような状況に陥っているのかといえば、事の起はイズムの暴走であり、承は鉄兵の暴走が原因である。

恐らく今までも夢想していたのであろう。ミスラルの有効利用方法の確立を現実的な夢と見て取ったイズムは、溢れんばかりの情熱でその貯まりに貯まっていたであろうアイデアを吐き出し始めた。そんなイズムの様子に、鉄兵が感化され思わず暴走してしまったわけである。

自身からみても未知の技術大系に到る可能性があるミスラルと言う物質に対し、密かに興奮気味であった鉄兵は、イズムの情熱に侵され、ついうっかりと自重を忘れて現代科学の見地からイズムのミスラル有効活用法の穴を突っ込みまくり、実用化に必要な修正のアイデアを出しまくった。

その結果、機能には制御が必要だとか制御とはＯＮ・ＯＦＦだとかつまりスイッチだとかスイッチとはなんぞやとか喧々轟々の議論があり、暴走した鉄兵が現代の定義を取り出し、果てにはどこぞから作り出した巨大な黒板もどきを前にチョークを手にし、とうとう突発的に簡単な電気回路の講義を始めたというわけである。

暴走した鉄兵が始めた講義は、元の世界では基礎であるものの、この世界では最先端をぶっちぎったような代物である。それがこの世界の住人では並大抵の理解力でついてこれるものではないと鉄兵が気が付いたのは、駄目な講師のように周囲の空気を忘れて叩きつけるように持論をぶちかました後だったのだが、しかし意外な事に一介の鍛冶師でしかないはずのイズムはどうした事か鉄兵の話を間違うことなく理解していた。

それを悟ってつい嬉しくなった鉄兵は、周囲を置いてけぼりにし

てイズムと互いに切磋琢磨しあうような講義を始め、ミスラルはその横で興味深そうに二人の話を聞きはじめた。そしてルナスとホーリィはその輪に加わる事を早々に諦め、今に至ると言うわけである。

さて、物語には起承転結と言うものがある。イズムにより『起』が生まれ、鉄兵により『承』が成ったなら、次には当然『転』が降りかかるのが道理であろう。

そんな感じに時は流れて一時間後の今現在。優雅なときを過ごしていたルナスが『腹の虫が動き始めたな』などとのん気に考え始めた頃に、『転』の始まりであるその音は突然鳴り響いた。

ゴンゴンゴンッ！！

議論がヒートアップする作業場に、一際大きくそのドアのノック音は響いた。

「なんだよ良いところで……どこのどいつだ？」

鉄兵の講義も佳境に入っていたところで水を差されたイズムは舌打ちをする。

「おぉ、忘れておった。すまぬな、これはわしが呼んだ客じゃ」

イズムの舌打ちに、ミスラルが思い出したように手を打った。

「あんたが？」

イズムが訝しげに眉を八の字に吊り上げる。鉄兵にはそのイズムの心象がなんとなく想像ができた。

ミスラルに客が来たと聞いてまず心に浮かんだのはミスラルの呼んだ客がミスラルと同等の存在ではないかと言う恐怖である。今のところミスラルは人畜無害だが、生きとし生けるもの全ての存在にとって脅威となりうる存在なのである。正直なところ世界標準から見て割とチートしている鉄兵から見ても二人いたら怖いどころの騒ぎではない。

次いで思い立ったのはミスラルがこの世に生じたのはつい先程の事であるという事実である。それからずっとここにいたのに、いつの間に人を呼んだのだろう？　というのは素直な疑問である。

「うむ。この世に顕現してわしも欲が生まれてのう。是非試したい事があって頼んできてもらったのじゃ」

「ほう？」

顕現したばかりのミスラルが先方を呼び出してまで果たしたい欲とはどんなものであろうか？　同じ技術者という共通点があるせいか、恐らく同じ興味を感じたイズムが鉄兵に変わって前のめりになる。

そんな二人の態度を見てか、迎えても問題ないと判断したのであろうホーリィがとことことドアに駆け寄って戸を開ける。

すると、そこにはものすごく怪しい人物が突っ立っていた。

黒頭巾に黒マスクの男。その男の特徴を一言で書けばこうである。

こう書けばものすごく怪しい人物に思えるだろうが、しかし困っ

た事にその怪しい人物は鉄兵の知り合いであった。

「あれ、シロ？」

黒い着流しに頭巾とマスクに覆われた顔から除く緑の目は、シロのそれであった。

「ようテツよ。やはりお前さんが関わってやがったか」

マスクをずり下げシロが軽口を叩く。その台詞を聞けばどうしてかシロはすでにミスラルの件を知っているようなそぶりであるにしても『やはり』とはなんだと反論したいところであったが、事実関わっているためそれはできないし、してはいけないところだろう。

「それはともかく、その格好はなに？」

自業自得で反論の出来ぬ鉄兵は、せめてもの反撃とばかりにシロの姿を揶揄してみた。

が、しかし軽いジョブ程度の軽口であったその言葉には、割ときつい鉄兵にとっては自業自得の回答が待っていた。

「俺は肌が弱いからな。傘が壊れちまったから応急処置ってやつさ」

「あー……ごめん。帰ったら直す」

そういえばシロの傘を破壊したのは鉄兵である。半ば芝居であったとはいえ本気の勝負の結果なのだが、日光に弱いシロの必需品である傘を壊したままだったのには今更ながら少しだけに気が咎めてシュンとなる。

「そうしてくれるとありがたいねぇ」

対して黒頭巾とマスクを外しながら言ったシロの言動に非難が含まれていたかといえば、それは一欠けらも無かった。カラカラ笑っていつものニッとした笑顔を見せる。いつもながらの事だが、そのカラッとしたシロの言葉に鉄兵の罪悪感は少しだけ晴れた。とりあえず城に帰ったら即効で城の傘を直そうと心に決める。

「あんたがミスラルの客人かい？」

そんな身内感漂う会話をする二人に、見えぬ状況に耐え切れなくなったらしいイズムが横から口を挟む。

「ミスラル？」

シロがイズムの言葉に首を傾げる。その表情から察するに、どうやらシロはミスラルの存在を知らないようである。ミスラルは自分の客が来たと言っていたが実は無関係なのだろうか？

「シロはミスラルの事を知ってここに来たんじゃないの？」

事の正否を見極めるために鉄兵が話題を差し向けると、シロはそれを察したらしく、自身の目的を語り始めた。

「さてな。俺はこの子の話を聞いてここに来たまでさ」

「この子？」

「そう、この子さ」

何の事やらと首を傾げる鉄兵に、シロは着流しの胸元からひょいと何かを摘み出し、そっと腕の中に収めた。短く触り心地のよさそうな灰茶の毛に覆われたアーモンド形の目をもつその小動物は、見紛うことなく猫という生物である。正確に言えばアビシニアンという種の猫である。さらに言えば、鉄兵にはなんとなく見覚えがある猫だった。元の世界ではす向かいの家で飼われていた猫がこんな姿だった気がする。

「なんだその生き物は？」

今はリルの影響で犬派に転んだとはいえ鉄兵は元は大の猫派である。久々に見るその愛らしい姿に鉄兵は思わず前後不覚に和んだりしたのだが、しかしイズムのその言葉に「んっ？」と現実に目を戻した。

イズムの言い方から察するに、少なくともこの地にはアビシニアン種の猫はいないようである。いるはずの無い生物で、なおかつ鉄兵に見覚えのあるという事は……

「ミスラルとはわしの事じゃよ」

シロの胸元で寛ぐ猫が、すっと首を伸ばしてそんな言葉を口にした。ミスラルとシロ、それに鉄兵の三人は冷静なものだったが、言葉を喋る猫を見て他の面々がぎょっとした態度を見せる。

「ああ、なるほどな。するってえと俺はお前さんの客人って事にここではなっているって訳か」

「うむ。その通りじゃ」

あたかも当然の事のようにシロと猫が会話する。つまりはまあ、あの猫は鉄兵の記憶から創り上げたミスラルの郡体の一つらしい。鉄兵はリルやハルコさんとの会話で慣れているが、やはり人型以外の生物が言葉を喋るのは一般的には刺激が強いようだ。他の面子は物理的に開いた口が塞がらない様子である。

「驚かせたかの？」

と、この台詞はお子様鉄兵バージョンのミスラルから出た言葉である。

「つまり、あの猫も？」

いち早く衝撃から戻ったルナスが問う。

「「さよう。どちらもわしじゃよ」」

猫の口とお子様バージョン鉄兵の口から、完璧なステレオで言葉が紡がれる。リアルで完全に一致した意味のある波長は意外な事に予想以上に気持ち悪い。

同じ存在が別々に二つ存在すると言うのは奇妙な感覚だが、いうなれば二つは親指と人差し指くらいの関係なのだろう。別の姿をしているが、操っているのは一つの意識といったところか。

少しばかり辟易した鉄兵がシロに説明を求める視線を送ると、シロは困ったように肩をすくめた。

「俺は呼ばれただけだぜ。さっき奇妙な違和感を覚えただろ？　そ

したらそいつが現れて茶道具持ってついて来いって言われたからここに来ただけさ」

「茶道具？　なんでまた」

と思わず突っ込んでしまったが、ミスラルがそう言って呼び出したと言う事は、理由は一つしかないだろう。

「無論、茶が飲みたいからじゃ！　茶と言うものは至極うまいものと知識にあるでのう」

身体を弾ませ、明らかにうきうきと言った好奇心に満ちたミスラルの表情を見る限り、その言葉には嘘は無いのだろう。だがそれにしても……

「なるほど、茶が飲みたかったからシロをよんだのか……」

「うむ！　あ、いや、それだけではないぞ！　ほんとだぞ！？」

威厳の欠片も無く子供のように素直にコクリと頷いたミスラルだが、なぜか慌ててそれだけではないと否定する。なにやら他に思惑もあるようだったが、どう考えても本命は茶のようである。

「まあ理由はなんだっていいさ。茶が飲みたいってなら一つ奢ってやろうかねぇ」

「うむ！　淹れて給れ」

結局は好奇心が勝ったらしく、城の言葉を聞いたミスラルは期待を身体全体で表現してはしゃぎはじめた。同時にシロの胸元にいる

猫形態のミスラルの尻尾がピンと立つ。

「んじゃま、茶を淹れる間にそちらの話も聞くとするかな。そこの鍛冶炉は借りていいのか？」

「あーなんだ……好きに使いな」

鉄兵の講義にはついてきたイズムだったが、どうやら今の会話は理解の外だったらしく、やや混乱気味のイズムは好きにしろと言わんばかりに苦笑した。

とまあそんなわけでシロが手持ちの荷物からポットを取り出して湯を沸かし、茶を淹れ始める。シロが茶を淹れている間、鉄兵は今までにあった事を要点良くシロに話して聞かせた。

「苦いのじゃ……」

点て

礼を

喜び勇んで

「あっはっは。まあお子様の舌にはちょいと合わん代物かもな」

大学に入って酒を飲み始めた頃から舌が大人になり、今では渋いお茶もそこそこ楽しめる鉄兵だが、子供の頃は年相応に甘いジュースが大好きで、お茶はそれほど好きではなかった。そんな子供形態の鉄兵を模したミスラルが本格的に淹れた抹茶など飲めばこうなる事は想定の範囲内である。ちなみに、それなのになぜ黙っていたかと言えば、

「さて、話は聞かせてもらったが、こりゃまた大袈裟な事態になってやがるな」

などと言いつつ、カラッカラッとシロが笑う。自分の存在からして非常識なだけに自覚はあるのだが、残念ながらシロの苦笑を動揺せずに受け入れるだけの度量はまだ備わっていない。

「しかしなんだ。お前さんたち、一番大事なことを聞いてないんだな」

「一番大事なこと？」

「そう、大事な事さ」

イズムも煙管をやるらしく、土間には灰皿が置かれている。

「さて、お前さんがあのミスラルの化身らしいってのはわかったが、」

「ん、理由など無いぞ？　」

「なら、用が済んだお前さんは直ぐに帰るのかい？」

「いや、特に考えてなかったが、そうだのう。

「んじゃま、一つだけ頼まれてくれないか？」

「なにをじゃ？」

「そうだな。皆仲良く……かな？」

「よおテツよ。」

目の前にいるのに誰もそこにいないかのように扱っていたのだ。

「

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1993z/

作業部屋

2011年12月7日03時47分発行